

Contemporary Ceramic Art From Kikuchi Collection

The 色彩のちから Power of Colors

展覧会会期

8月6日(土) ~ 12月4日(日)

菊池寛実記念 智美術館

〒105-0001 東京都港区虎ノ門 4-1-35 西久保ビル B1F

<http://www.musee-tomo.or.jp>

図1a) 三代 徳田八十吉「耀彩鉢〈黎明〉」1986年
(撮影 尾見重治、大塚敏幸)

プレスプレビューのご案内は8頁をご覧ください。

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

平素より、私ども菊池寛実記念 智美術館の活動にご理解とご協力を賜り、誠にありがとうございます。このたび当館では2016年8月6日(土)から12月4日(日)までの会期にて展覧会、「The Power of Colors 色彩のちから」を開催いたします。本展は陶磁器の色の魅力に着目し、菊池コレクションを中心に作家およそ25人、60点の作品をご紹介しますものです。つきましては、展覧会の概要、見どころ等をお知らせいたしますので、ひとりでも多くのお客様にお運びいただけるよう、周知にご協力を賜りますよう謹んでお願い申し上げます。

敬具

■ 展覧会概要 ■

◆展覧会タイトル：

「The Power of Colors 色彩のちから」

- 会 期 2016年8月6日(土)～12月4日(日)
- 主 催 公益財団法人菊池美術財団、日本経済新聞社
- 協 賛 京葉ガス株式会社
- 協 力 徳田八十吉陶房、加島美術
- 会 場 菊池寛実記念 智美術館 (〒105-0001 東京都港区虎ノ門4-1-35 西久保ビル)
<http://www.musee-tomo.or.jp>
- 観覧料 一般1,000円／大学生800円／小中高生500円
- 開館時間 午前11時から午後6時まで(入館は午後5時30分まで)
- 休館日 毎週月曜日(ただし9/19、10/10は開館)、9/20(火)、10/11(火)

- 展示内容 菊池コレクションより近現代作家の陶磁器作品約60点を展示。
 - ・石黒宗麿、河井寛次郎、川瀬忍、小池頌子、十四代酒井田柿右衛門、富本憲吉、深見陶冶、藤本能道、藤平伸、八木一夫、他。
 - ・コレクションに加え下記の作品を出品いたします。

特別出品

「色彩」をテーマとする本展に合わせ、九谷焼の色絵技法を独自の表現に高め、「彩釉磁器」で重要無形文化財保持者に認定された、三代徳田八十吉氏(1933-2009)の晩年の未発表作を展示いたします。

自然の形象を鋭い眼差しで切り取る写真家、六田知弘氏(1956-)の写真作品を陶磁器と合わせて展示いたします。

リピーター割引実施！

会期中、2回目のご鑑賞の方は本展半券のご提示にて300円割引となります。※招待券は適用外。他の割引は併用できません。

展覧会内容、広報に関するお問い合わせ

担当：高田・島崎

☎03-5733-5131／FAX：03-5733-5132

■ 展覧会のご紹介・見どころ ■

現代は多くの色彩に溢れ、色は私たちの生活に大きな影響を及ぼしています。例を挙げるならば、信号機の青・黄・赤など社会ルールとして機能している色、或いはウエディングドレスの白や喪服の黒といった文化や慣習に関わる色から、食欲を刺激し、食べ物を美味しそうに見せる赤といった人間の生理的な感覚に訴える色まで、多くの人が色の効果を実感する場面を経験しているのではないのでしょうか。意識、無意識に関わらず、色彩は私たちの心身に作用する強い力を持っています。こうした「色彩のちから」は、芸術表現においても創作の重要な要素であり、本展では特に陶磁器の色に注目したいと思います。

陶芸の分野でも、染付のコバルトブルー、青磁の涼しげな淡青色、或いは色絵や辰砂釉の鮮烈な赤など、作品がまとう美しい色彩は大きな魅力のひとつです。ただし、陶磁器の色が通常の絵具や着色剤と異なる点は、それが窯で焼成されることではじめて発色し、定着するものであることです。土や釉薬、絵具に含まれる酸化金属が呈色剤となる陶磁器の色は、含有成分の微量な違い、窯内の温湿度や状態、火の作用、天候、周囲の環境等、様々な条件によって焼上がりが変わるといい、コントロールが非常に難しいものです。陶芸家は自身の理想に合う作品を得るために経験を積み、技を磨くことで、素材に潜む思がけない色のちからを探り出し、土に豊かな表情を与えてきました。そうして生まれる陶磁器の色は、独特の深みがあり、見るものを引きつけます。展覧会では、現代の作り手が自らの技で素材へ挑み、生み出した、豊かな色彩の世界をお楽しみいただきます。

❖展示では、素材や制作法による色のあらわれ方に着目しながら、作品を色調ごとに並べてご覧いただきます。

赤

Red



富本 憲吉「金銀彩角盒」1962 年

全面に赤と金銀彩が施された華やかな陶箱は、文様を得意とした富本憲吉の作品。

器本体を 1200℃以上で高温焼成した後、専用の絵具で絵を描き、800℃前後の低温で焼成、定着させる上絵付は、多彩な色が出せるものの高度な技術が求められます。本作は赤の絵具を塗り焼いた後、金銀彩を重ね再度焼成されています。

辻清明の信楽焼の赤は、やきものの土台である土そのものから引き出された色で、「緋色」とも呼ばれます。

辻清明（1927-2008）は、燃料に薪を使い、釉薬を掛けないまま、土を炎と熱に直接さらして焼き締める信楽焼を得意としました。焼き締めの陶磁器は、釉薬が表面を覆わないため、土そのものの色味を見ることが出来ます。本作では、土に含まれる鉄分が反応し、茶褐色から鮮やかな赤色まで、複雑に発色しています。また薪から大量に発生する灰が作品に降り、溶けることで、さらに豊かな色と質感が生まれています。



図2) 辻 清明 「信楽帽子、信楽ステッキ」1982 年

緑

Green



図3) 石黒 宗麿「緑釉壺」1950-52 年頃

石黒宗麿（1893-1968）は中国、朝鮮、日本等の古陶磁を研究し体得した技術を自身の創作に巧みに活かしました。本作は中国の三彩技法から発展させた作品。白化粧と透明釉を施し高火度焼成した壺に蠟で斑紋を描き、低火度の緑釉を掛け焼くと、蠟で弾かれた部分が白抜き模様となるというものです。

草木の灰を含む灰釉、酸化銅が呈色剤となる緑釉など、深い色味が魅力の緑の釉薬。

草木の灰を原料とする灰釉、灰釉をベースに酸化銅を加える緑釉（銅緑釉）など、緑色はとくに釉薬としての幅が豊富です。そして同じ緑の釉でも、成分により薄い黄緑から濃い色まで色調にも多くのバリエーションがあります。



鈴木 徹「緑釉鉢」2005 年

鈴木徹（1964-）は、地元の岐阜県美濃地方で桃山時代に優品が多く作られた、織部焼の伝統的な緑釉を制作のテーマとし、そこに簡潔で力強い形を合わせています。異なる色調の緑釉が溶けあって流れ、土の粗い肌に溜まることで躍動感やリズムが生まれています。

青

Blue

淡い青色が涼しげな空気を醸し出す青磁と青白磁。どちらも釉薬に含まれる微量な鉄分が、還元焼成という焼き方により青味を帯び、独特の色が生まれます。

青磁釉に含まれる鉄分は僅かですが、焼成時に窯内に酸素を送らない「還元焼成」という焼成を行うことで、釉薬が青く発色します。ひとくちに青といっても釉薬、土、焼成の組合せによって色は千変万化を見せます。

青磁をライフワークとする川瀬忍（1950-）は、中国で宋時代に作られた汝窯や南宋官窯といった極めて質の高い青磁を目標としながら、精緻な形と清澄な青の色彩に独自の作風を確立しています。本作も底部から口先まで緊張感ある形に光沢ある美しい釉が掛かり、凛とした佇まいを見せます。



図4) 加藤 委「Freeze Flame」1993 年



川瀬 忍「青磁花入」1988 年

青白磁は白磁の一種で、磁土に青味がかった半透明の釉薬が掛かったやきものです。形の凹凸部に釉が厚く溜まることで色の深みが増し、それが装飾効果となります。

加藤委（1962-）は白色度の高い磁土の厚板を歪め、先端を削いだ荒々しい形に、氷を思わせる水色の釉を掛け、“凍りつく炎”という題名に相応しい劇的な造形に仕上げています。

色絵 Poly- chrome

色絵は磁器や陶器の本体を 1200℃前後の高火度で焼いた後、上絵具で絵付けを施し、絵具に適した 7～800℃程度の低火度で再び焼成し、鮮やかな色を発色、定着させていきます。色の素になるのはコバルト、銅、鉄、マンガンなど様々な酸化金属や、時には金といった高価な素材も使われます。焼成の温湿度管理が重要なことはもちろん、紙や布と異なり陶磁器の上に絵具を乗せるため、絵付け自体にも独特な難しさがあります。上絵、色絵、赤絵、五彩など様々な呼称があります。

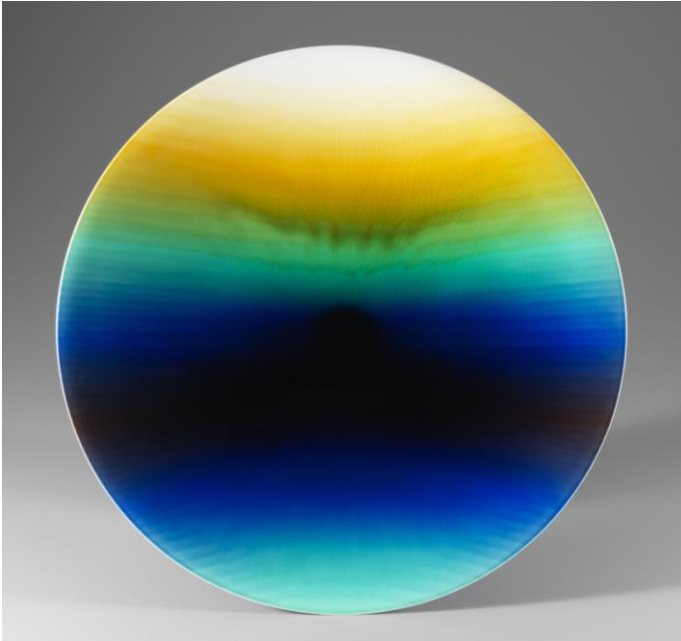


図 1b) 三代 徳田八十吉 「耀彩鉢〈黎明〉」1986 年

色絵磁器の産地である石川県で名工と言われた祖父の色を受継ぎつつ、絵具が耐える限界ギリギリまで焼成温度を上げ、色の発色と美しさを際立たせるという革新的発想で新たな表現を生んだのが三代徳田八十吉（1933－2009）です。本作はその代表作のひとつで、海に釣りに行き出会った日の出の美しさに感動し、その情景を表したという、作家唯一の具象表現をとった作品です。



図 5) 藤本能道
「霜白釉描色絵金彩花と虫図六角大皿」1990 年

藤本能道（1919－1992）は東京美術学校にて図案を学んだ後、富本憲吉などに師事し陶芸の道に進みました。藤本は絵画的な空間表現をやきものに取り入れるため、釉薬の上に絵を施す通常の上絵付技法に加えて、上絵の下地となる釉薬の段階で色釉によって絵を描く「釉描（ゆうびょう）」の技を編み出しました。本作は菊池コレクションが収蔵する晩年の傑作で、白釉と赤く鮮やかな辰砂釉で大輪の花を表現し、そこに金彩の虫を合せ豪華で幽玄な世界を創出しています。



スミソニアン博物館での所蔵品展にて

■ 菊池コレクションについて

菊池コレクションは、当館創立者の菊池智^{きくちとも}（1923－）が長年にわたり蒐集した現代陶芸のコレクションです。当館の基となるこのコレクションには、日本の現代陶芸を語る上で欠かせない作家の多彩な作品が収蔵されています。

菊池と陶磁器との出会いは、第二次世界大戦の時代に遡ります。炭鉱を経営していた父、菊池寛実^{かんじつ}が、徴用で働きに来ていた瀬戸の陶工のために登窯をつくり、東京から疎開してきた菊池がそこを訪れたのがその契機でした。死が身近であった戦時下に多感な十代を過ごしていた菊池にとって、土が炎に包まれ新たな姿へと生まれ変わる窯場の情景は、自らの生とつながる強烈な体験として記憶されることとなりました。

戦後、1950年代後半から始まった陶磁器蒐集は、愛好が深まるにつれて、その魅力を広めたいという思いへ発展します。それは 1983 年には米国スミソニアン博物館にて日本の現代陶芸を紹介する米国初の展覧会で具体的なカタチとなり、やがて 2003 年の智美術館開館へとつながりました。

彼女の美意識を反映した菊池コレクションは、その後も充実をみせ、特に藤本能道（1919－1992／重要無形文化財「色絵磁器」認定）、鈴木藏（1934－／同「志野」）、藤平伸（1922－2013）などの良質な作品がまとまって収蔵されています。

■ 関連行事 ■

「色を知る、色を楽しむ」をキーワードに、
やきものと色彩にまつわるイベントを様々な角度から開催します。

◆講演会「色材文化を視る・知る－青と赤－」

10月29日(土) 15:00より (予約不要・聴講無料) 当館 B1 階展示室ホールにて

講師 降旗 千賀子 氏 (目黒区美術館学芸員)

色の原料となる色材の歴史と美術の関わりをテーマとする展覧会、「色の博物誌」展を企画担当される降旗千賀子氏を講師にお招きし、ご講演いただきます。

◆アーティストトーク (予約不要・聴講無料) 当館 B1 階展示室にて

9月24日(土) 15:00より 作家 四代 徳田 八十吉 氏 (彩釉磁器)

10月15日(土) 15:00より 作家 川瀬 忍 氏 (青磁)

11月12日(土) 15:00より 作家 鈴木 徹 氏 (緑釉)

釉彩磁器、青磁、緑釉など、それぞれの色彩に独自の創作テーマを持ち制作を続ける陶芸家をお招きし、アーティストトークを開催します。

◆親子の陶芸ワークショップ

「アートな陶芸にチャレンジ!! わたしの色と形をつくる」

8月20日(土)、21日(日)の2日間連続、14:00～16:30

講師: 杉浦 康益 氏 (陶芸家)

対象: こどもとその保護者 定員: 12名 (事前申込み制)

参加費: こども 4,000円、大人 4,500円 (材料・焼成費、2日間の観覧料を含む)

※大人のみの参加はお受け出来ません。子どものみ参加の場合も小学生以下は保護者の同伴をお願いします。

巨大なインスタレーションから、植物の形をテーマとする繊細な「陶の博物誌」シリーズまで、陶芸作家として、幅広い活動を続ける杉浦氏を講師に迎え行うワークショップ。成形と絵付けまで2日間かけじっくり制作します。

◆ナイトミュージアム・コンサート 当館 B1 階展示室にて

「バロックチェロの魅力ー“音の色”を楽しむ」

演奏: 懸田 貴嗣 氏 (バロックチェロ)

10月15日(土) 18:45 (18:30 開場※予定)

定員 60名様 (事前申込み制) 参加費 3,000円 (観覧料含む。当日観覧券をお持ちの方は 2,000円)

閉館後の展示室を会場に作品と共に演奏をお楽しみいただくユニークなコンサートです。

♣親子で巡る展覧会・鑑賞ツアー (予約不要・聴講無料)

8月13日/11月19日…各土曜日 14:00

♣学芸員によるギャラリートーク (予約不要・聴講無料)

9月3日、17日/10月22日/11月5日…各土曜日 14:00

♣西洋館見学会 (予約制・定員 20名様)

9月10日/10月8日/11月12日…各土曜日 11:00

西洋館見学、美術館観覧料、レストラン ヴォワ・ラクテでのランチを含めお一人様 8,000円

有料のイベントは先着順にて受付 (智美術館 03-5733-5131)
聴講無料の行事は当日の観覧券が必要となります。各詳細は HP にてお知らせします。

■本展覧会について広報媒体へ掲載、取材をいただく場合、本リリースに紹介されている作品画像をデータでお貸し出しいたします。申込書のご希望の図版に☑を記し、用紙を返信のうえ、お問い合わせください。ご紹介いただく記事、番組内容については、情報確認のため校正の段階で事務局までお知らせください。お貸出しする画像データは本展覧会終了をもって使用期限とさせていただきます。作品の画像を1点以上ご掲載の上、本展をご紹介くださる媒体に対し、本展ご招待券を読者プレゼント用に提供いたします。申込書、所定の欄に招待券希望の旨を明記してください。

掲載に関するお問い合わせ先 菊池寛実記念 智美術館 (担当：高田、島崎)
TEL.03 (5733) 5131 FAX.03 (5733) 5132 <http://www.musee-tomo.or.jp/>

掲載・画像貸出申込書

返信先 FAX : 03-5733-5132

●貴社基本情報

会社名:	
担当部署:	担当者名:
住所:	
電話	ファックス:
E-MAIL:	

●媒体情報

新聞 雑誌	媒体名:	
	発行日:	発売日:
TV ラジオ	媒体名:	
	放送日:	放送時間:
ネット	URL:	

●画像貸出リスト ※キャプションには作者・作品名・制作年、撮影者（※明記のあるもの）を必ず入れてください。

希望作品に☑	作品キャプション
☐	図 1a, b) 三代 徳田八十吉 「燿彩鉢〈黎明〉」 1986 年 径 45.6 cm (撮影：尾見重治、大塚敏幸)
☐	図 2) 辻 清明「信楽帽子、信楽ステッキ」 1982 年 長さ 78.5 cm (ステッキ) (撮影：小林庸浩)
☐	図 3) 石黒 宗麿「緑釉壺」 1950-52 年頃 高 22.7 cm (撮影：小林庸浩)
☐	図 4) 加藤 委「Freeze Flame」 1993 年 58.5×29.0 cm (撮影：尾見重治、大塚敏幸)
☐	図 5) 藤本 能道「霜白釉描色絵金彩花と虫図六角大筥」 1990 年 32.0×36.6 cm (撮影：尾見重治、大塚敏幸)

※図1・作品名の漢字表記に誤りがございました。お詫びして訂正申し上げます (2016/9/15 修正済)

●読者プレゼント用チケット希望： ☐ 5組 10名様 ☐ 10組 20名様

プレスプレビューのご案内

展覧会の趣旨、作品解説など、内覧会に先立ちましてプレスの皆様にご説明申し上げます。
ご多用のなか恐縮に存じますが、どうぞご出席くださいますようお願い申し上げます。

菊池寛実記念 智美術館

プレスプレビュー 2016年8月5日(金) 14:00 ～

14:00 ～14:45 展示室にて、展覧会のご説明、作品解説などを行います。

展覧会の会場内をご撮影いただけます。

14:45 ～15:00 皆様からのご質問にお答えいたします。

会場： 菊池寛実記念 智美術館 〒105-0001 港区虎ノ門 4-1-35 西久保ビル B1

- ・ 日比谷線・神谷町駅出口 4b より徒歩 6 分
- ・ 南北線・六本木一丁目駅改札口より徒歩 8 分
- ・ 南北線／銀座線・溜池山王駅出口 13 より徒歩 8 分
- ・ 銀座線・虎ノ門駅： 出口 3 より徒歩 10 分

◆.....
ご出席いただける場合は、下記フォームにご記入の上、FAX にて

ご返信下さい。**返信先 FAX 03-5733-5132**

会社名：

担当部署、氏名

住所：

電話：

FAX：

Email